

世界最北の日本人学校

～ 在ロシア日本国大使館附属モスクワ日本人学校での教育実践から ～

前モスクワ日本人学校 教諭

旭川市立陵雲小学校 教諭 吉中 博道

1 はじめに

平成16年度から19年度までの3年間在ロシア日本国大使館附属モスクワ日本人学校に派遣された。たった3年間とは言え、西洋と東洋の文化の入り混じった、そして一時期、世界の一極の中心であったモスクワで生活し、子どもたちとともに学習できたことは何事にも代えがたい経験となった。

2 ロシアという国・モスクワという都市

(1) 地理・歴史

ひとつの国の中に実に9つの標準時をもち、日本に一番近い隣国でもあるロシア。その中のモスクワは、日本との時差が6時間（夏時間時は5時間）緯度は旭川と比べて10度北に上った北緯55度に位置する。

気候は旭川とほぼ同程度。最低気温がマイナス20度を下回ることは珍しく、16年度と18年度には最低気温がマイナス19度台だった。夏はたまに30度を越えることもある。雪の量は旭川市の半分程度。3月中に雪のほとんどが姿を消す。

成田・モスクワ間の直行便は週2便。約9時間の旅となる。

モスクワは人口1000万強といわれるが、他地域からの不正規流入が多く、正確な数は当局も把握していない模様。

モスクワ市は1周約108kmの「環状高速自動車道(ムカート)」と呼ばれる高速道路で囲まれている。このモスクワ市内には個人住宅を建てることはできず、富裕層はモスクワ周辺に豪邸を建てることになる。



ロシアの政治の中心 クレムリン

(2) 歴史

ロシアという国は東ヨーロッパに点在していたスラブ民族の集落を、ノルマン人の王を迎えて統一したのが始まりとされる。このときの中心はウクライナのキエフである。10世紀には東方正教会を受け入れ、ソ連時代の弾圧を経た現在もロシア正教会の信者が80パーセントを占める。

モスクワの歴史は1156年、ユーリー・ドルゴルーキーが当時ロシア各地の諸侯に「モスクワ川畔に集え」と統一を呼びかけたことに始まるといわれる。有名なクレムリンは「城壁」という意味であり、都市の守りの要である。

13世紀にはキプチャク・ハン国に敗れ16世紀末まで支配を受け、「タタールのくびき」といわれる時期を過ごすこととなる。このときに力をつけたのがモスクワ大公であり、後にモスクワがロシアの中心となるきっかけである。

ロシアの西洋化を強力に推し進めたのはピョートル1世であり、現在でも彼の人気は高い。

ロシア革命は、最後のロシア皇帝ニコライ2世の絶対専制政治が産業革命と第一次世界大戦による社会の変容に対応できず、労働者や農民

の力に倒れたものである。



今では残り少ないレーニン像

ソヴィエト連邦成立後、世界各地の社会主義革命を支援し、世界の一極の中心となるが、農業政策の失敗などから崩壊、ロシアとして現在に至る。

(3) 生活事情

「暮らしやすい国ランキング」で、111か国中104位（2005年英国エコノミー誌による）に位置するのがロシアである。経済の安定や物価の高騰、治安、衛生状態などがネックになっているものと思われる。

年金が200ドル強ということもあり、最低限の生活を営むための物価は決して高くない。しかし、外国人が自国にいるときのような安全を確保するには相当の努力と出費が必要となる。モスクワは、ロシア国内での水準からすれば相当地に物価が高いとされている。しかし、モスクワで働けばその分、高収入が期待できるため、人口の流入は増え続けている。ソ連崩壊後、貧富の差は広がる一方である。

公共交通機関は充実しているが、近年の値上がり激しい。水道・光熱などの生活インフラストラクチャも無料に近かったものが近年値上がりしている。火力発電所がモスクワ市内やすぐそばにあり、そこからの温水が無料に近い形で使えるのは合理的である。

医療も基本的に無料であるが、医療水準は高くなく、現地人は「病院に行ったら殺される」などとジョークを言っていた。HIV陽性率は実に日本の100倍との公式発表だが、それすら、実態を十分に反映していないという。外国人はアメリカ資本・ヨーロッパ資本の病院をっており、高額な医療費を支払うことになる。

治安に関しては一時期よりもよくなってきているようであるが、日本人の感覚ではまだまだ怖いところという感じが否めない。そもそも、警察官の主な収入源が賄賂であり、いかにたかりから逃れるかが大切な生活の知恵となる。

(4) 文化

偉大な作曲家を多数輩出した国でもあり、また、抽象芸術のさきがけとなったロシア・アバングアルドの発祥の地でもあるなど、ヨーロッパ的な文化は盛んである。

特に世界に誇るポリショイ劇場のオペラやバレエは日本人にとってもなじみやすく、演劇も市内の随所で上演されている。多数のプーシキン美術館をはじめとする多数の美術館は市民にとっても身近なものである。

なお、邦人としては西村知実がモスクワフィルハーモニー交響楽団の指揮者として、また、岩田守弘がポリショイバレエ団のソリストとして活躍している。モスクワ大学や、ポリショイバレエ学校、各種スポーツなどで日本からの留学生を受け入れているところも多い。



バレエの殿堂 ポリショイ劇場（現在改修中）

(5) 教育事情

7歳から17歳までの公教育は無料だが、最近私立学校も増えている。未成年の飲酒や喫煙が問題となっていた。日本のような小・中・高の区分はなく、10年生を終われば大学に進学できる。順調に進学して卒業すれば、21歳で大学を卒業することになる。

大学の頂点に位置するモスクワ大学であっても教授の給与は月額200ドル前後といわれ、入学試験準備のための個人授業(1時間100ドルが相場)が主な収入源となっていると聞く。

公立学校の前半では午前中で終わることが多く、午後からは各地域の文化センターなどで、思い思いの活動に取り組む。日本人学校の隣にあったセンターでは、サンボ、ダンス、バレエ、絵画、ビーズ手芸などを教えていた。これらはすべて無料である。



子ども創造文化センターのダンス講座

3 モスクワ日本人学校の様子

(1) 概要

昭和42年10月創立のモスクワ日本人学校はヨーロッパでもっとも古い日本人学校である。名称からも分かるとおり、大使館附属の学校となっている。現地の学校としては認可されていない。小学部・中学部合わせた児童生徒数は近年100名前後で推移しており、2007年度5月現在107名である。

校舎は外国人滞在者サービス局(УПДК Уボデカ)から貸与されている5階建ての建物である。ただし、1階はスウェーデン人学校、2階

はイタリア人学校、3階はフィンランド人学校であり、4階と5階が日本人学校である。ただし、5階にある体育館は4つの学校で時間ごとにシェアしていた。グラウンドも、狭いながらも芝のフィールドとゴムウレタンのトラックという本格的なものが与えられた。

(2) 安全の確保

治安の心配があり、子どもだけの通学は認めていない。保護者とともに通学するか、スクールバスでの通学となる。全部で5台のバスを運行していたが、そのうちの3台は、ひとつのマンションの子どもを主な対象としたものであった。(日本人学校の派遣教諭も同じマンションに居住している)なお、保護者にはそれぞれのバス停までの送り迎えを義務付けている。

学校の敷地は常時2名のガードマンが警備している。このガードマンは施設の管理者である外国人滞在サービス局がおいっているものである。その他に、学校経費で雇用しているガードマンが昼間2名、夜間1名体制で建物内部を警備していた。

(3) 英会話学習

在外教育施設一般に言えることだと思われるが、英語学習にかかわる要求が大変高い。日本国内だと、小学校では「英語に親しむ活動」などという名目で「抵抗感をなくす」などの目標を掲げて実践されているところであるが、モスクワ日本人学校においては、ある程度英語で会話ができるようになることが求められた。オックスフォードの「Chatter Box」という小学生向けのテキストを使いながら週2時間を位置づけて、中学部英語科教諭と現地採用のAET2名とで指導に当たっている。

(4) ロシア語学習

学校や家では日本語で過ごす子どもたちであるが、一歩外に出れば、看板そのほかすべてロシア語の環境に暮らす子どもたちである。現地の言葉を知らないことは、日常、受け取る情報の多くを遮断されることになる。

自由に会話できるようにならなくとも、文字

をみて発音ができるようになること、単語の意味をひとつでも覚えることは、それだけ、子どもの目を外部に開いていくことに直結する。

そこで、小学部では週2時間、中学部においては年間10時間をロシア語の時間として位置づけている。

4 モスクワ日本人学校における国際理解教育

(1) 写生会

日本では実施されることの少なくなってきた写生会であるが、ロシアの文化に触れる機会のひとつとして、写生会を実施した。モスクワ市内には宮殿や庭園など、歴史的な建造物が多く残されている。このような建造物に触れ、味わう貴重な機会となっている。

18年度には少し傾向を変えて、トレチャコフ美術館新館のそばの「芸術公園」を会場として選んだ。ソ連時代からのロシアの芸術家の彫刻作品が美しい庭園の中に多数展示されている公園である。レーニン像などは、モスクワ市内でも見ることが少なくなっているが、ここでは、レーニン以上に人気が無いスターリン像も見られる。

また、抽象的な作品が噴水とともに展示されているなど、そこにいるだけで、発達段階なりに楽しむことができる。



芸術公園での写生会の様子

子どもたちは、庭園としての美しさ、彫刻作品の面白さ、都市の真ん中の空間としての面白

さなど、思い思いの面白さを見つけながら政策に取り組んでいた。

出来上がった作品は、校内作品展として校内に展示して交流したほか、希望者は日本の教育美術展覧会に出品するなどしていた。

(2) 美術館見学

モスクワにはトレチャコフ美術館やプーシキン美術館といった大変充実した美術館が多数ある。そのような恵まれた環境を生かすべく、中学部美術科の教育課程の中に美術館見学を位置づけて実践してきた。本稿ではその中の、中学部1年生におけるプーシキン美術館の見学を取り上げたい。

プーシキン美術館は、もともとロシアの美術を志す学生が西洋の美術に触れることができるように創設された美術館である。世界の著名な彫刻作品の石膏による複製品が多数展示されていることはその名残と思われる。絵画作品はほとんどが本物であり、これは世界三大美術館に必ず名の挙がるエルミタージュのエカテリーナ女王のコレクションから分割収蔵されたものも多い。

しかし、注目すべきは19世紀末以降の作品の充実である。帝政ロシア末期に活躍した美術収集家シチューキンとモロゾフの二人が、エコール・ド・パリの画家たちの作品を積極的に買い集めた結果である。その充実振りは、2006年に東京都美術館と大阪の国立国際美術館で開かれた「プーシキン美術館展」として日本でも広く知られるところとなった。

なお、日本での展覧会終了後、美術館の大きな改変が行われ、18世紀末以降の作品は新館とも言うべき隣の建物に移された。

事前指導

見学以前に西洋美術に関する基本的な知識をもっておくことが鑑賞のために有益であると考え、ピカソ・マティスなどの画家たちについて学習した。

まず、子どもたちに「知っている画家の名前

を挙げてごらん」と問いかけ、列挙した後、その多くが印象派以降の画家であること、そのほとんどの画家の作品がプーシキン美術館には収蔵されていることを伝えた。

後述する副読本「わたしたちのモスクワ」を参照しながら、その主だった作品を紹介し、自分の興味のある作品を設定させた。

その上で、後日、美術館で実物を鑑賞することを伝え、実際に見た感想をレポートすることとした。

鑑賞の実際

美術館への往復はスクールバスを使って行った。まず、全体を大まかに見て回った。教師の簡単な解説とともに全員で鑑賞した。

その上で、自分で設定した課題に向けて、個々が特定の作品を深く鑑賞する時間をとった。

子どもたちは、美術館の配列にしたがって、自分が興味をもった画家の他作品と比べながら見たり、他の画家との個性の違いなどに留意したりしながら鑑賞に取り組んだ。

生徒のレポートから

ピカソの絵は全体が青い感じでなぜだろうと思っていたが、美術館で見ると、なんか不思議な感じが出せるんだなと思った。

ボナールの絵は、なんだかぼやっとして暖かい感じが好きだったけど、本物を見て、ますます好きになった。とても大きくてびっくりした。

(3) マトリョーシュカ・ペインティング

ロシアの伝統的な工芸に触れる機会を持たせたいと、小学部の教育課程の中にヤイツォー作りとマトリョーシュカ・ペインティングを位置づけている。

マトリョーシュカは日本でもおなじみのロシアの民芸品であるが、その起源は日本の箱根細工だといわれており、その原型とされている七福神の入れ子細工がモスクワ近郊の町、セルギエフ・パッサートのおもちゃ博物館に保管されている。

私が派遣されてからは、縁あって、有名なマ

トリョーシュカ作家のジャンナ・ニコラエワ氏に講師をお願いしている。

この先生の授業は、日本での一般的な図工の授業と違い、「このあたりにこのくらいの円を描きなさい」「その円を縦・横に2等分しなさい」「4等分した高さのところに、この大きさの円を描いて目しなさい」など、徹底的に細かな指示を与えるものである。おかげで、すべての子どもが一定以上のクォリティの作品を仕上げることができた。ロシアの文化に触れるという意味以外にも、巧緻性の向上や技能に対する自信をつけるという意味でも、子どもたちにとって貴重な体験となっている。

前述のとおり、モスクワ日本人学校の児童はある程度の英会話の能力を有しており、ジャンナ氏も英語で話すことができるので、18年度は直接英語で授業をしてもらった。

中には指示を一部分しか理解できない児童もいるが、友達のフォローや教師の細く説明で他の子と同様に仕上げることができた。



ジャンナ・ニコラエワ先生の授業から

(4) 4校交流

モスクワ日本人学校の大きな特徴に、同じ建物にスウェーデン、イタリア、フィンランドの外国人学校が同居していることが挙げられる。固定した交流は設定していないが、折に触れて交流する雰囲気徐徐にできつつある。

リレーカーニバル

何しろ、もともとがまったく言語の違う4つ

の国が集まってスポーツ交流をするには、莫大な打ち合わせを必要とする。比較的、ルールが単純なリレーであれば取り組みやすかろうと設定された行事である。

4校合同避難訓練

火災などが起きた場合には同じ校舎を利用する4校の連携が重要と考えられるが、外国の学校では避難訓練はそれほど一般的ではないらしい。16年度、日本人学校の方から呼びかけると、「それでは一度やってみよう」ということになった。

日本人学校で火災が発生したとの想定のもと、4つの学校が無事に避難を完了することができた。

その後、一旦、すべての学校の児童生徒が体育館に集合し、反省を行った。全体総括はスウェーデン人学校の校長先生にお願いし、英語のスピーチを各国語に同時通訳する形で行われた。

この全体総括だけは、他校に不評で、以後、4校合同避難訓練は、避難の練習のみ全体で行い、反省などは各学校で行うこととなった。

その他の交流

それぞれの学校が自国の文化を広めようということも徐々に増えてきている。ルシア祭はスウェーデンの伝統行事である。聖ルシアに扮した、真っ白い衣装に身を包んだ女の子を先頭に日本でもよく知られたイタリア民謡「サンタルチア」を歌いながら行進するものである。以前はそのような行進をしながら、他の3つの学校を回っていたが、18年度からはすべての学校を体育館に集め、その前で発表するという形を取るようになった。

イタリア人学校からは、毎年、カーニバルに招待されている。簡単なゲームを4カ国対抗で競い合い、終了後、簡単なおやつをご馳走になるというものである。

また、4校そろってではないが、サッカーやバスケットボールの試合など、ちょくちょく声をかけあい、試合をしていた。ちなみに、一番強いのはやはりイタリアであった。



リレーカーニバルでの開会式

(5) 現地校との交流

ロシアの公立学校はすべて番号で呼ばれている。日本人学校は1239番校と呼ばれる学校との交流を継続してきた。

年に2回の相互訪問の中で、お互いの国の学習の様子を知ることができることに大きな価値があると考えてのことである。

低学年では折り紙を教えたり、ロシアの遊びを教えてもらったりという活動を行っているし、中学年では、習字を教えたり、ロシアでの算数の授業をともに受けたりということをしている。

その中で、私が図工専科としてかかわった例を挙げる。

竹とんぼ作り

日本の伝統的な遊びに触れようということで、取り組んだ活動である。

ロシアのホームセンターで、インテリア用に売られていた竹を、非力な小刀で割り、決まった長さに切断。真ん中に2.5mmの穴を開けたものを用意した。軸となる竹棒も割ったものから3mm角程度の棒として用意した。

まず、日本人学校の小学部6年生が竹とんぼ作りに取り組んだ。切り出し小刀は2年生で使った経験がある子がほとんどだが、実生活の中で切り出しを使う経験はほとんどない。硬い竹を削るのは大変であるが、治具を用意するなどして、安全に削ることができるよう配慮した。

この経験を元に、6年生が中心となって、口

シアの子どもたちに作り方を教えた。ロシア語については十分話すことができない子どもたちであるが、「見本を見せる」「英語やロシア語で教える」「通訳の助けを借りる」などの手段で教えることができた。

全員が、怪我無く竹とんぼを完成させることができ、和気藹々のうちに交流を終えることができた。

最後の感想交流で、「日本のテクノロジーの基礎がこんなところにあるのかと感心した」というロシアの子どもの言葉が印象的であった。

風車作り

小学部1年生では、「風車作り」を教えた。これも、事前に日本人学校の児童が作り方の練習をし、次にロシアの子どもたちに1対1で教えることにした。

材料は、日本から取り寄せてあった千代紙と割り箸、ストローや針金である。

作り方の全体的な説明は私が行い、通訳を通してロシア語の説明を聞くことになる。

日本の子どもたちはお手本を見せながら、必要ところはロシアの子のお手伝いをするという形で交流が進められた。

出来上がった風車を持って、プレイルームで一緒に遊ぶ活動を行い、最後には、風車の羽に、お互いのなまえをロシア語でサインしあって記念とした。

(6) もちつき

日本人学校の子供たちが日本の文化に触れる貴重な機会のひとつとして、毎年「もちつき」を行事として取り入れてきた。

臼と杵は大使館から借用し、もち米はモスクワ市内の日本食料品店より購入していた。

この日は、保護者の協力を得ながら、実施しており、もちを返すなどは保護者をお願いしている。

小学部1年生から順番に全員が杵を持ち、もちつきに参加させている。つきあがったもち自分たちで丸め、思い思いの味をつけて食べた

り、各自が決まった量を持ち帰ったりしている。

更に、18年度からは、同居のスウェーデンやイタリア、フィンランドの学校にも声をかけ、日本の伝統的な文化に触れてもらう機会としている。

5 ロシアにおける社会科副読本作り

日本の小学校3・4年生の社会科学習においては、その地域で作られた副読本が不可欠である。日本国内であれば、教育委員会などが中心になって、その土地の地理や歴史、産業などが適切に学習できるよう工夫されている。しかし、在外教育施設において、このようなものを用意するのは大変なことである。

ひとつには、人的資源が乏しいこと。基本的に日本人学校の教諭が作成することになる。日常の教育実践だけでも精一杯である上に、少ない派遣教諭だけで、情報収集し、執筆するのは大変な負担であった。

更に、情報収集のための手段が日本国内にいるときに比べて格段に限定されるということである。まず、何を調べるにも言語の壁があること。そこは通訳を通すにしても、十分に内容を咀嚼できているかが難しい。また、相手が外国人であれば、ロシアのよい面のみをアピールし、そうでない面は隠す傾向にある。そもそも、そのような内容は一般市民には知らされていないことも多い。

そのような事情もあり、モスクワ日本人学校では、十数年前に作られた副読本を連綿と使ってきた。なんと、ソ連崩壊以前に作られたものである。大変なのはわかっているが、このままではいけないということで、1年間の計画で作成したのが、新しい副読本「私たちのモスクワ」である。

副読本作成の方針について

まず、副読本を作るに当たって、日本の小学校中学年が使っているもののモスクワ版でよいのかが議論になった。モスクワに生活しているにもかかわらず、子どもたちがロシアについて、モスクワについて知る機会が著しく制約されて

いる。もっと広く、小学部1年生から中学部3年生までが、自分たちの生活する土地について理解を深められるものにしたいとの願いが出された。

治安の悪さをはじめとし、モスクワでの生活にネガティブな印象を持っている子どもたちに、「少しでも、ロシアやモスクワのよさを伝えたい。今、ここに暮らしていることを前向きに捉えられるようにしてやりたい」という編集方針が打ち出された。

具体的には、小学部低学年の生活科学習のときのガイドとしての内容や、中学部の美術や歴史の学習に使える内容などが追加されることになった。

取材について

副読本作りの取材といえば、各施設の訪問やインタビューが中心となる。様々な施設でのアポイントを通訳経由でとることになるが、簡単に了解が取れるわけではない。責任者の了解を得るために時間がかかったり、訪問直前にキャンセルされたりするなど、日常茶飯事である。

インタビューの質問をロシア語で聞いてもらい、その答えを日本語にしてもらうわけだが、その正確さを期すためには、質問の仕方と確認のために細心の注意を払わねばならなかった。

書籍からの翻訳も行ったが、これらは、学校で雇用している通訳のほか、モスクワに居住するロシア語に堪能な方の協力も得て行った。

インターネットからの情報に関しては、英語のサイトが役立った。ロシア語のサイトに関しては一部自動翻訳（英語へ）も活用している。

印刷・製本について

現地において日本語の印刷物を作るのは簡単なことではない。日本語が読めない業者では、作業過程で起こる様々なトラブルや不都合に気づかないまま印刷物が出来上がってしまう可能性があるからである。今回は、幸い、日本語の分かる印刷業者を紹介してもらうことができた。それでも、日本語をPDFファイルに変換する際のソフトウェアのトラブルで、うまく変換さ

れていないことが多々あった。日本語の印刷にかかわる技術的な問題を業者とともに解決していく必要があったが、業者は誠意をもって、根気強く対応してくれたことに感謝したい。

副読本の活用

当初の目標どおり、小学部中学年の社会科で使う以外にも盛りだくさんの内容が含まれる副読本が出来上がった。

低学年の子どもたちが動物園見学に行くときに、事前学習で、見学の計画を立てるのに活用したり、郵便局見学のまとめに使ったりと活用の場面は多い。

また、中学年の社会科の学習では、浄水場やごみ焼却場の見学が、そのときの担当者や責任者によっては見学を許可されないことも少なくない。どうしても、見学ができない場合は副読本を通してモスクワの様子を知るしかないと考えられる。不十分であるが、これが在外教育施設の限界でもある。

中学部美術の時間に美術館見学の事前学習に活用したり、世界史の学習の中で、ロシアの歴史について深めたりすることができるようになった。

6 終わりに

「ロシアって大変だったでしょ？」と聞かれることが多い。私はいつも「エキサイティングで面白かったです」と答えている。確かに、日本での40数年を、いかに漫然と生きていたかを思い知らされることは多かった。

在外教育施設で学ぶには困難が多い。しかし、それを一つ一つ克服していく面白さがある。そして、それが子どもたちの笑顔になったとき、何にも変えがたい喜びになる。

しかし、そのような場面は、国内でも同様に見出すことができることである。今後の実践に生かしていきたい。